

この「広報ひこね」は48,400部作成し、1部当たりの単価は6円（1円未満切り捨て）です。ただし、原稿作成・編集などにかかる職員の人件費は含まれていません。

連載企画 「わたしの町の戦国」 第7回

佐和山とその時代② 佐和山籠城戦

織田信長の近江侵攻

江北の京極氏・浅井氏と江南の六角氏が三つ巴の争いを展開する中で、境目に位置した佐和山はしばしば3者の攻略の目標となりました。

こうした状況の近江に、永禄11年（1568）9月、岐阜を本拠とする織田信長が京を目指して侵攻してきました。信長は近江侵攻に先立って浅井長政と手を結び、妹お市を長政に輿入れさせて近江に侵攻の足場を作り、一気に六角氏の箕作山城と観音寺城を攻めま

す。箕作山城は即日、観音寺城は翌日に落城。六角承禎は甲賀へ敗走して、再び観音寺城に戻ることはありませんでした。こうして、さしたる苦もなく近江を制圧し、岐阜から京都までの通路を確保したかにみえた信長でしたが、その反動は早々にやってきました。まず、信長の支援により將軍の地位にいた足利義昭が、やがて毛利・朝倉・武田・石山本願寺などと手を結んで信長に抗するようになり、信長と義昭の間には一時期調停が成立し、元龜

佐和山籠城戦

一方、信長勢は、横山城（長浜市）に木下秀吉を配して北の小谷城に備えるとともに、南の佐和山城に対しては、東の百々屋敷（丸山城）に丹羽長秀、北の山（物生山）に市橋長利、南の山（里根山）に水野信元、そして彦根山に河尻秀隆をそれぞれ布陣させて動きを封じ込める方策を講じています。

元年（1570）4月、信長は朝倉義景を討つため越前（福井県）に入り、予想外の敵が背後に出現します。妹婿浅井長政が反旗をひるがえしたので、腹背に攻撃を受けることになった信長は、決死の脱出行を試み、朽木越えで京都に逃げ帰り、その後千種越えにより、やっこの思いで岐阜までたどり着きました。信長は、入京を急ぐあまり、近江を軽んじ過ぎたきらいがありました。

姉川の合戦

近江の統治を改めてやり直すべく、体勢を立て直した信長が、徳川家康と連合し、近江に向かって再び侵攻を開始したのは元龜元年6月のことでした。これに対する浅井長政は、越前の朝倉義景の応援を受け、姉川流域で一大決戦を展開することになりました。姉川の合戦です。激戦9時間におよんだというこの戦いは、織田・徳川方の勝利に帰します。敗れた浅井・朝倉勢は、北の小谷城、南の佐和山城に分かれて逃げ込み、再起を計ることになりました。

この時、佐和山城に籠城したのは、永禄4年（1561）以降、浅井長政より佐和山城を預かっていた磯野員昌を

に逆心ありとして受け入れられず、なす術を失った員昌はついに信長に降伏し、佐和山城を明け渡しました。信長の下に降った員昌は彼から高島郡を与えられ、佐和山城には信長の重臣丹羽長秀が入りました。

問い合わせ先 市教育委員会文化財課 ☎26-58033番、FAX 26-58099番、Eメール: bunkazai@mx.hikone.ed.jp

佐和山籠城戦配置図

